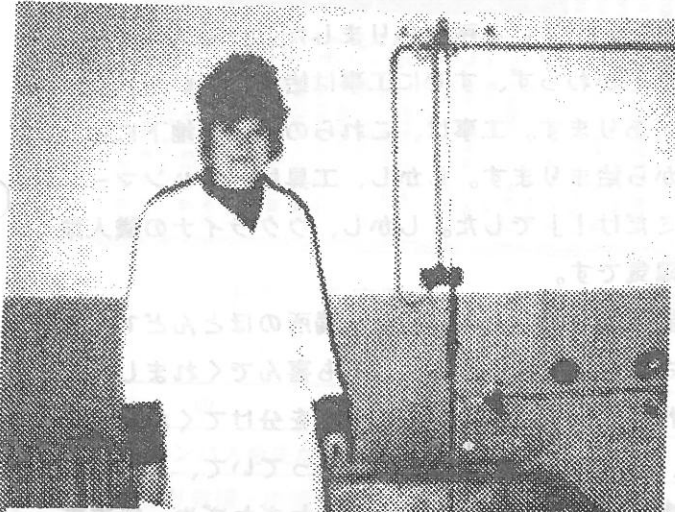


チェルノブイリに思いをよせて

# ポレーシエ

## 伊那の原さん、ナロジチへ行く！



「お湯をありがとう。  
私達に少し希望が見えてきました。」

この冬のウクライナは、めずらしく暖冬で、雪も非常に少なく原さんは幸運でした。原さんのナロジチ滞在の目的は、チェルノブイリ地区病院の給湯設備工場の状況を把握し、かつ自ら作業に参加することです。私は通訳として同行し、病院の現場を見、半ば人の住んでいないナロジチの町の、二階建ての小さなホテル(水がほとんど出ず、お湯はない)で眠りました。

言葉の壁を全く気にせず、飾らない人柄が愛され、『自分で家を建てた人』『何でもできる人』という評判が広まっており、自宅の改修や別荘の建築は、自分でやるのが当たり前のウクライナでは特にウケが良く、「手を見れば、ひと目で労働者だとわかる」と言う好意的な言葉もしばしば耳にしました。

1月28日から2月26日までナロジチに滞在した原さんは、この先ずっと、『ナロジチに最も長く滞在した外国人』として語り継がれることに違いありません。(キエフ・竹内)

〈事務局〉〒466 名古屋市昭和区楽園町137-1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：神野英樹

【郵便振替】00880-7-108610

☎FAX:052-836-1073 (月・水・金・10:30~15:30)

(問い合わせは、お名前とシールの番号を明記し、返信用切手を同封の上、なるべく郵便でお願いします。)



水も、お湯もでたよ！

## 祝 ナロジチ病院 給水・給湯設備完成！

ナロジチ病院の「給水・給湯工事」を手伝うため、1月27日から2月28日まで、ウクライナに行ってきました。ナロジチは、例年より暖かいとは言うものの、僕の住む長野県よりも寒く、空はどんよりとして、お陽様に元気がありません。

水道設備は、15年間、まともに通水していなかったので、配管内の錆がひどく、蛇口の壊れた部分には、漏水を防ぐため、木片をたたき込んであるという有様でした。建物の地下の配水管が壊れ、汚物が床一面にあふれている所もありました。一目見ただけで、逃げ出したくなるようなひどい状況にもかかわらず、すでに工事は始まっていました。

ナロジチ病院には、いくつもの病棟があります。工事は、これらの建物の地下に潜って、錆で詰まった給水管をばらすことから始まります。しかし、工具は、「ハンマーとグラインダー、そして、溶接機と石ノミだけ！」でした。しかし、ウクライナの職人衆は、わずかな工具でよく働き、とても陽気です。

2月末には、病院内の16か所に温水器が取り付けられ、必要な場所のほとんどで、水もお湯も出るようになりました。院長さんも看護婦さんも、とても喜んでくれました。特に、助産婦さんは、大喜びをしてくれて、自分の弁当である昼食を分けてくれました。パンと脂肉だけの質素な食事でしたが、助産婦さんの気持ちがこもっていて、とても素敵な思い出の食事となりました。この事ひとつだけでも、日本からわざわざやって来て、本当によかったと思いました。

ナロジチ病院の敷地内にも、放射能汚染は残っています。暇を見つけて、測定器で測ってみましたが、日本の7倍から38倍の放射能が測定されました。

病院では、赤ちゃんが生まれ、町の通りでは、子どもが遊びます。移住先に住みづらくなって、ナロジチに戻ってくる人もいます。救急車もなく、馬車の荷台に敷かれた布団に横たわって、病院に運び込まれて来たおばあさんも見ました。

病院の近くの川では、汚染されている事を知りながら、夕飯のおかずのために、魚を釣っている老人がいました。工事の完成を喜びつつも、一方で自分の心に沸き起こる「これで汚染地から出られるんだ」という思い。…複雑でした。いずれにしても、僕たちがナロジチでできる事は、まだまだたくさん残されています。

皆さん、応援どうもありがとう！ 原 富男



<救急車がわりの荷馬車>

# チェルノブイリ救援グループ また心こもる贈り物

地元の人と給水設備の修理に出たボランティア  
ロシア病院で「チェルノブイリ救援・中部提供」



ロシア病院で給水設備の修理に出たボランティア  
ロシア病院で給水設備の修理に出たボランティア  
ロシア病院で給水設備の修理に出たボランティア  
ロシア病院で給水設備の修理に出たボランティア  
ロシア病院で給水設備の修理に出たボランティア  
ロシア病院で給水設備の修理に出たボランティア  
ロシア病院で給水設備の修理に出たボランティア  
ロシア病院で給水設備の修理に出たボランティア  
ロシア病院で給水設備の修理に出たボランティア  
ロシア病院で給水設備の修理に出たボランティア

## 水道の出ない 病院に給水施設

一九八六年の旧ソ連・チェルノブイリ原発事故による被災地の被害を軽減する「チェルノブイリ救援・中部」(神戸英商代巻)が昨年十月から取り組んでいる「ナロジチ病院の給水施設工事」がほぼ完了した。工事費用の半分以上は「給水からの寄付」で賄った。チェルノブイリ救援・中部は三日、全中道市中地区医師の中小企業センター「ナロジチ」の給水施設を視察した。

### 一般の寄付など430万円で30日に報告会

果敢の寄付は四十三万  
が、ナロジチ病院が  
建設費の約十五万  
口約三十万、放射線  
水が水が、井水も  
飲めず、給水設備の  
壊れた。チェルノブイリ  
の「ナロジチ」は、  
給水施設の修理に出た  
ボランティアが、昨年十月から  
ナロジチ病院の給水設備の修理に出たボランティア  
ナロジチ病院の給水設備の修理に出たボランティア  
ナロジチ病院の給水設備の修理に出たボランティア  
ナロジチ病院の給水設備の修理に出たボランティア  
ナロジチ病院の給水設備の修理に出たボランティア  
ナロジチ病院の給水設備の修理に出たボランティア  
ナロジチ病院の給水設備の修理に出たボランティア  
ナロジチ病院の給水設備の修理に出たボランティア  
ナロジチ病院の給水設備の修理に出たボランティア

### ナロジチ病院給水・給湯設備支援カンパ等収支 (96年10月～97年2月)

単位：円

収入		支出	
項目	金額	項目	金額
カンパ入金先など		費目	
チェルノブイリ救援・中部へカンパ	110,000	第1回外貨送金(12月27日)	2,325,000
チェルノブイリ救援・名古屋へカンパ	2,035,211	第2回外貨送金(2月14日)	2,512,000
伊那谷いのちがだいじ連絡会へカンパ	178,320	原さん派遣費用	399,667
NIS医療支援委員会(外務省、入金予定)	2,100,000	送金手数料	6,750
救援・中部より(為替レート変動による不足分補填)	379,000		
救援・中部より(原さん派遣費用)	399,667		
救援・名古屋より物品売り上げカンパ	41,219		
収入合計	5,243,417	支出合計	5,243,417

寄付して下さった方々は、69個人とチェルノブイリ支援・宮城、静岡星美小学校、むつみ子ども文庫、長野で原子力を考える会、の4団体でした。伊那には、遠くアメリカからのカンパもあり、私たちを感激させてくれました。ナロジチ病院のスタッフ、被災者住民に代わって、厚くお礼申し上げます。どうも有り難うございました。

なお、今回の工事で積み残した、病理棟、配膳室への配管工事、ボイラー工事にはさらに8500ドル(約100万円)が必要です。一日も早く全ての建物でお湯が出るよう支援したいと思います。ひき続き、カンパを募集しています。よろしくお願ひします。

(振替用紙には、ナロジチ・カンパと明記して下さい。)

私達「チェルノブイリ救援・中部」は、  
あの「動燃／核燃料再処理工場」の事故を看過する事が出来ません。  
「動燃」および「科学技術庁」に対して、下記の抗議文を提出しました。

## 東海村の動燃火災・爆発事故に抗議する

動燃理事長 近藤俊幸 殿  
科学技術庁長官 近岡理一郎 殿

1997年3月18日  
チェルノブイリ救援・中部

3月11日に発生した東海村の動燃火災・爆発事故は、私たちに大きな衝撃を与えています。今回の事故は、1995年1月の「もんじゅ」事故とともに、日本の原子力政策の基本である「プルトニウム再利用」が、技術的にきわめて危険な土台の上に築かれていることを明らかにしました。アメリカ・ヨーロッパをはじめ、世界中の国々が原発とプルトニウム利用を断念した教訓が、わが国ではなんら生かされず未熟な技術に対する過信と判断ミスが、今回の事故の真の原因です。

「もんじゅ」事故の場合と同様、動燃の初期火災に対する甘い判断が、さらに大きな爆発事故の引き金を引きました。建物中に放射能レベル上昇の警報が鳴り響いていたにもかかわらず、「大したことはない」という判断で換気装置を停止したことで汚染が広がり、不必要な37名の被曝をもたらしました。また、数分後の爆発の危険も知らずに、火災現場に向っていた20余名の作業員の人々の命が救われたのは全くの偶然でしかありません。爆発は、全く予想も想定もしていなかったのですから。動燃発表では、「被曝は全て基準値以内で問題ない」とされています。しかし、実際には体内に取り込んだセシウム137が数百ベクレルを越える人々が多数おり、最高2700ベクレルの人もいます。「基準値以内で異常なし」とされるこれらの人々の体内放射能レベルは、チェルノブイリの汚染地域に住む住民と同程度であり、日本人の平均(20~30ベクレル)の10倍~100倍にもなります。

さらに、事故に際しての判断の甘さは、事故当時、大学生ら一般の見学者には何も知らせず、火災現場近くを案内していた無神経にも表れています。関係当局や周辺市町村に対する連絡の遅れも、「もんじゅ」事故以来、動燃の体質が何も変わっていないことを示しています。

私たちは、政府にも大きな責任があると思います。この再処理工場は政府の安全審査をパスして、建設運転されており、爆発による放射能の閉じこめ失敗という事態を想定していなかった事は安全審査にも大きな欠陥があることを明らかにしました。事故対応も遅く、「1週間たってやっと事故調査委員会が現地調査をする」ということでは、はたして本当に原因が解明出来るのでしょうか。

私たちは、私たちと私たちの子孫がこれ以上危険と不安の中で暮らすことの無いように政府が危険なプルトニウム利用政策を一刻も早く断念するよう要望します。具体的には、「もんじゅ」の永久停止と、現在、森県六ヶ所村に建設中の、再処理工場の建設中止、政府が推進しようとしている、原発でのプルトニウム燃焼利用を断念するよう要望します。

以上

ウクライナに友人を…。

あなたも文通相手になってください!



コンニチハ、美しい日いつる国のみなさん!

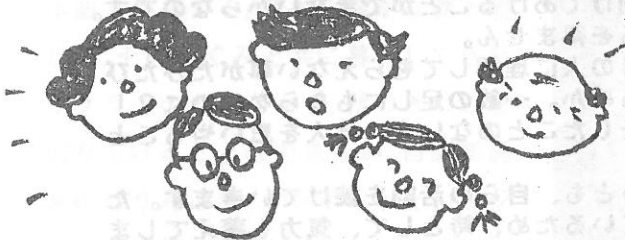
ウクライナの母たちは、皆様にご挨拶いたしますと同時に、「ヘルプ44救援・中部」が ヘルプ44の被災者に、友好と援助の手を差し延べてくださることに、お礼申し上げます。ドウモアリガトウ!!

5年にわたって、「ピース社」と、「救援・中部」が、日本とウクライナの間、友好の「橋」を架け渡してくれたことに感謝します…。

日本とウクライナの子供たちの、友情にあふれた文通が、立派に花開き今日まで続いています。 ヘルプ44の惨事から十年、それは無残にも多くの人間の苦難を生みました。けれども日本の「オリヅル」の子供たちと、ウクライナのヘルプ44の子供たちとの五年の友情は、なんとすばらしいことでしょう!

……愛する日本の友、私達おとなと生徒たちは、あなた方から太陽のような明るさと、喜びを感謝しつつ受け取りました。そのことから、もっと強く心豊かになりました。「優しい言葉は傷をいやす」と言います。

すばらしい人々と知り合いになりました。日いつる国での35日間は、おとぎ話のような素晴らしい話でしたが、広島を訪ねて私の心は痛みました。ウクライナのヘルプ44が広島での悲劇を繰り返してしまっただけでなく、この地球上で悲運にみまわれた日本人の涙と、ウクライナ人の涙は同じです。人々は様々な異なる言語を話すけれど、同じように泣きます。だから、私達はお互いに理解できます…。



'96年2月 ウクライナ・ジトミル州 マルビツ村

ニナ・M・ワルコ

この、ニナ先生の手紙から、ヘルプ44事故で被害を受けた人々が文通などの交流によって、心の傷が癒され、より強くなり困難な日常の中に喜びさえ見出して、明日への希望につなげて行こうとしている姿がうかがえます。

昨年、ヘルプ44救援・中部に手紙をくれたウクライナの被災者、30人余りが日本の人々との文通を希望しています。

…と言っても、事故のことにこだわって「何か気が重い」などと考えないで、気軽な友人になるつもりで、自分の仕事や家族、日本の社会や日常生活などを書いて交流してください。年に2、3通で結構です。ロシア語で書いていただける方は勿論大歓迎ですが、日本語の手紙で書いて下されば、ボラチアの方々に訳してもらいます。まずは「ヘルプ44救援・中部の事務局」にご連絡下さい。ご紹介とお世話をさせていただきます。

(松田)

## 【魚】の支援から【釣針】の支援へ

1997. 3. 14.

「人は、不幸になってはじめて、本当の友達を知る。」という諺があります。不幸は、1986年4月、チェルノブイリ原子力発電所の爆発とともに、私たちのウクライナに降りかかってきました。それ以来、私たちの心は休まる時がなく、私たちは自分自身の病気を恐れ、子どもたちの健康を心配し、国と国民の将来を憂えながら暮らしています。

「時がたつのは早い」といいますが、この間の私たちの状況は、時とともにますます深刻になってきています。経済が失速してしまい、人々は貧しくなり、医療の窮状のために、事故の処理の問題はほとんど解決されていません。このような状況ですから、外部からの援助はとても大きな意義を持っています。そして、ウクライナの人々は、援助を続けてくださる市民団体に、深い感謝の気持ちを抱いています。

「チェルノブイリ救援・中部」の寄付金で、「移住基金」が購入した医療機器や医薬品のない「ナロジチ病院」を想像することは、今や全く不可能といってもよいでしょう。

日本の友人たちの援助は、「州立小児病院」や「ブルシロフ病院」、事故処理作業者のための病院「内務省病院」、バラノフカ地区の移住者の村にある「ゼレムリャ診療所」といった、ジトーミル州のほかの医療施設にとっても大変重要です。

「移住基金」と「チェルノブイリ救援・中部」の協力で、この間に行われた援助の総額は、300万米ドル近くにのぼります。ウクライナ国民は、このあたたかい援助を、本当に大切なものと考えています。毎年ジトーミルを訪問する「チェルノブイリ救援・中部」の代表団の方々には、この気持ちを、何度となく確認して下さっていると思います。

私は、個人的には、「魚」そのものの援助ではなく、「(魚を得るために必要な)釣針(=自立のための道具)」の援助こそ大切であると考えていますので、「粉ミルク」「医薬品」「医療機器」等のお願いに際しては、しばしば、恥ずかしさを感じないではられません。しかし、あえてこのようなお願いをするのは、私達の誰一人として、病気の子ども達や被災者の人々を、助けてあげることができないからなのです。自らの誇りは、ふとこころに忍ばせておかざるを得ません。

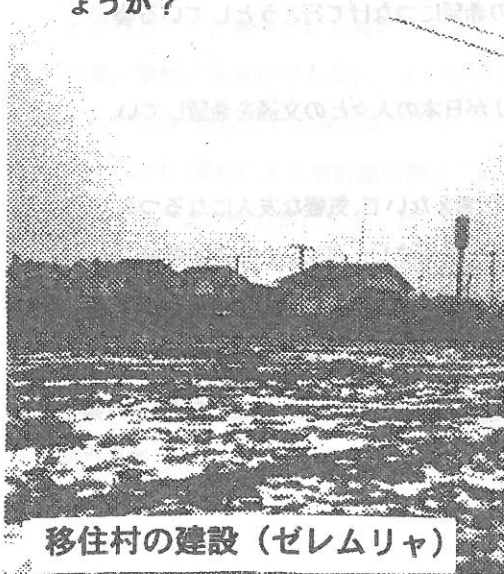
私たち「移住基金」のメンバーは、まわりの人に理解してもらえない事がたびたびあります。「どうして、そんな活動を続けるのか。一銭の足しにもならないのに？」こんなふう感じて平気なのは、辛い思いをしたことのない人、他人を思いやることのできない人達だけでしょう。

しかし、私たちは、どんなに困難であろうとも、自らの活動を続けていきます。たった今でさえ、困難があまりにも山積みしているため、時として、気力も萎えてしまいそうになります。

しかし、ほかの誰が「チェルノブイリの犠牲者」たちを助けてくれるというのでしょうか？

移住基金 代表  
V. キリチャンスキー

移住により残された廃屋 (ナロジチ)



移住村の建設 (ゼレムリャ)

## チェルノブイリ 物の食う人々のきょう・あした

(禁断の森) 2月23日に辺見庸原作の「もの食う人びと」(共同通信社刊)が名古屋テレビでドキュメンタリー化された。チェルノブイリ篇「禁断の森」と、私がウクライナを訪れてチェルノブイリでものを食べ、垣間見た、人々のもの食う風景とを重ねてみたい。

俳優石橋蓮司は30キロゾーンの村、チェルノブイリ原発内部、プリピャチ川を訪れて、強制移住地に戻り生活している人々に会い、彼らのもてなすご馳走を食べる。最初は放射能に汚染しているだろう食べ物を恐るおそる口に運び、次には「おいしい!」と戸惑いながら食べ、最後はもう居直るように人々と共に飲みかつ食べて食事を楽しむ。多分チェルノブイリを訪れものを食べた人は、彼と同じだったのではないだろうか。

(きのこ) 森のきのこが危ないことはよく知られている。ためらい、見つめていると、「これは安全なところで取れたものだから大丈夫」だという。そういつてすすめられれば食べないわけにはいかない。保存食として塩漬けや酢漬けにされていて、それがスープやマリネなどに料理されるととてもおいしく、本当は危ないだろうな...と思いつながらもついもうひと口と手が出てしまう。石橋氏と同じだ。

95年10月、シトーミルの町のバザールできのこが売られていた。旅行カバンに満杯のきのこを売っていたおばさんは、「これは安全証明書付きだよ」と外国人の私にびど山のきのこをすすめる。...じゃあこの隣のバケツいっぱいのはどうなの?と日本語でつぶやく。昔から豊かな森と親しみ、そのめぐみと共に暮らしてきたウクライナの人々から、秋のきのこを取り上げることはできない。自家製酒を作るりんごや、カンポートというジュースに使う苺やルビーのように赤いカリーナの実も。



「どこで採れたの?」「南。だから安全よ!」

(牛乳) キエフに住むある青年は、原発事故当時13歳だった。放射能の知識があった化学者の両親は、すぐに窓の目張りをし、家の中では靴を脱ぎ、放射能を持ち込まないようにした。牛乳・チーズなどの乳製品は汚染されているのでいっさいとらず、乳製品の入ったお菓子も食べない。「きのこも9年間一度も食べていない」と語った。意識してものを食べるか食べないかで、食品から受ける体内被曝は大きく違ってくる。

(魚) テレビの画面にプリピャチ川流域の美しい風景が映し出される。たくさんの沼や森の広がるこのあたりをポレーシエという。一帯は高濃度に汚染され、人々が憩う保養地は永久に失われてしまった。この川の魚も危険と言われる。ウハーという魚のスープは、脂っこい料理の多い中でさっぱりとおいしい。「あれもダメ、これも危ないって、いったい何を食えばいいんだ」という現地の人々にどう答えればいいのか。

(水) 雪解けの春、プリピャチ川が洪水で氾濫すると、放射能が250万キエフ市民の飲料水を取水しているダム湖に流れ込むと危惧される。川よ、穏やかにあれ! (戸村京子)

## 97. 5月. 専門家派遣 日程決まる!!

日程：5月14日（水）～28日（水）

参加者：松浦千秋（検査技師）、神野美知江（看護婦）、山盛三千枝（事務局）他2名

目的：移住村の人達の生活・健康調査と診療所の診療状況調査。

事故処理作業班の支援のための聞き取り調査。

ゼレムリヤ村は、私達が支援している移住者の村です。96年度は、その村にある診療所に医薬品と医療機器を送りました。今回の訪問は、その村に住む人達の生活や健康状態をアンケートと聞き取りにより調査します。そして、移住者の村が自立するためにはどんな支援が必要であるかを知り、これからの活動の参考にしたいと考えています。

また、今年の活動計画として、事故処理作業に従事し被曝した人々の支援が決定されました。そのための聞き取り調査も、今回の訪問の目的です。ジトーミル州における事故処理班の全体的な把握のための調査と、様々な立場に置かれている事故処理班の方々の個別的な聞き取りを丁寧に行いたいと考えています。

たくさんの質問を準備中ですが、統計作業を行うというよりも、チェルノブイリ事故に直接関与し、犠牲者となった彼等一人一人の生の声をじっくりと聞いてこようと考えています。

### 事務局だより

3月11日の動燃・再処理工場で起きた火災・爆発、それによる大量の放射能漏れ事故のニュースを見ていた息子が「この人達（動燃）は、本当に本当に事故のことなんか考えていなかったんだね。信じられないよ。」とつくづく言った。

95年12月の高速増殖炉「もんじゅ」の配管ナトリウム漏れ事故と今回の事故は超猛毒物質「プルトニウム」を再利用しようという目的で行われる「核燃料サイクル」が、いかに非現実的で危険極まりないものかということを私達に警告してくれている

また、これらの事故についての動燃の情報は二転三転し、次第にその被害は拡大し、深刻なものとなった。「もんじゅ」の事故の際の教訓を何も生かそうとはしていない。

迅速な情報収集・対応、周辺住民への通報、正確かつ加工しない情報の公表、どれをとってみても全く不十分である。

チェルノブイリ事故の被害の拡大は、まさにそのことが原因であった。そして、その被害者の苦しみは、11年経過した今でも続いており、誰一人として、その苦しみから解放する保障を示すことができない。

私は、いつも「救援」という活動を行いながら、二度と「救援」などという事態が起きぬようにと祈るような思いでいる。

いつもながら、原子力にしるプルトニウムにしる、それを推進し、無責任な対応を、取り返しのつかない事態を引き起こす人々に対して、激しい憤りを覚える。

(山盛)



## ＜ 97年度の活動方針が決まりました！＞

去る 3月 8日に開かれた運営委員会において、'97年度の私達の活動方針が決定されました。その主な内容を紹介します。

- ① 被災地の子どもたちへの支援  
今や、救援活動のシンボルとなった「ミルクキャンペーン」「クリスマスカードキャンペーン」を継続します。(11月～12月)  
また、子どもたちの治療のため、国立小児病院の切実な要望である「人工呼吸器」などの医療機器を送りたいと考えています。
- ② 移住村の人たちへの支援  
'96年度からスタートした移住村の人たちへの支援は、彼等の「自立」を目指して継続します。
- ③ 汚染地に住む人たちへの支援  
原さんの活躍により、水もお湯も出るようになったナロジチ病院。移住村の人たちと同様に、彼等の「自立」を目指して支援を継続します。
- ④ 後遺症に苦しむ事故処理に従事した人たちへの支援  
事故処理にかり出された人たち、その後の防災のために日夜危険地帯で働いている人たちの間で、深刻な放射能障害が発生しています。彼等の生の声を調査して、皆さんに報告します。具体的な支援のあり方を考え、できる事から始めます。
- ⑤ 「移住基金」の活動への支援  
私達の救援活動の架け橋である現地のパートナー「移住基金」は、極度の財政難の中、年金生活者や低所得者などの弱者を救うための崇高な活動を続けています。私達も一緒になって、この救援活動を行いたいと考えています。
- ⑥ その他  
「文通」による心の支援を継続します。また、機会があれば、講演会やチャリティーコンサート・バザーなどを、随時企画していきたいと思います。

ウクライナの経済状態を考えると、「自立への道」は、とても厳しいと言わざるを得ません。しかし、私達はこの事故の被害を、他人事として見過ごす事ができません。

皆さんご存じのように、「もんじゅ」の事故に続き、またしても「動燃」が、東海村「再処理工場」で、重大な事故を発生させてしまいました。

私達は、チェルノブイリとともに、日本の私達の生活も、自分達の手で守っていかなければなりません。

「チェルノブイリの子どもたちに、  
きれいな粉ミルクを送りたい」

「もんじゅや原発のある日本に、  
きれいな粉ミルクを残したい」・・・それが私達の願いです。



報告が遅くなりましたが、引き続き来年度も「救援・中部」の代表をさせていただく事になりました。皆様のご支援をよろしくお願い致します。

お知らせ

- ◇コバレフスカヤさんの「講演ビデオとテープ」貸出中(送料別) ... 500円/回
- ◆救援・中部のTシャツ ... 1,500円/枚
- ◇とどけ鳥のデザインのオリジナルステッカー(好評!) ... 200円/枚
- ◆絵はがき集(子ども達から届いた手紙や絵)(5枚入/セット) ... 300円/個
- ◇「たった一回の原発事故で」(救援・中部編 地湧社) ... 500円/冊
- ◆「とどけウクライナへ~私たちの救援日誌」(飯塚弘美著 八月書館) ... 1,600円/冊
- ◇「ネチポレンコさんとライサさんの講演録」(専門家の解説付) ... 350円/冊
- ◆「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」(チェルノブイリ支援・九月) ... 1,300円/冊
- ◇放射能測定器「シンテック」(大気中の放射能が、常時測定出来ます) ... 10,000円/台
- ◆ " 「プリピャチ」(3種類の放射能が測定出来ます) ... 30,000円/台

救援・中部までお申し込みください!

あなたも維持会員になってください。

チェルノブイリ救援・中部の活動を続けるために、事務局の維持費用が必要です。是非、事務局維持会員になってください。

☆ 維持会員会費 10,000円/年(または、1,000円/月)

(※通信欄に、「維持会員費」として、救援・中部の口座にご送金を。)

編集後記



- \*春めいてきました。このほのほのとした春の青空の下、放射能まじりの花粉は、私にひどい咳と鼻水をもたらしました。私にさわやかな春を返して!(美)
- \*「一家に1台の時代です。」 えっ? 「パソコン」じゃありませんよ。もちろん、「車」でも「携帯電話」でもありません。そう、「放射能測定器」なのです。ただ今、「チェルノ」特別ご用達の「シンテック(10,000円/台)」「プリピャチ(30,000円/台)」絶賛発売中!(放射能が私達に忍び寄る時代が来ました。)(J)
- \*春を迎える「ポレーシェ」...私達の通信「ポレーシェ」は、救援活動を始めた時、遠く日本から、「チェルノブイリの人の悲しみに、思いをよせたい」との願いを込めて、現地でいち早く取材し被害を伝えられた「故松岡信夫氏」の著作の中から、名付けたものだ。現地には、本物の「ポレーシェ新聞」があり、なんと「ポレーシェ銀行」もあった!(K)
- \*今まで、編集委員会の中心であった「救援・岐阜」のメンバーは、ご家族が、相次いで入院・自宅療養となり、編集への参加を断念。今回のポレーシェ作りで、その才能の素晴らしさをつくづく感じた。ポレーシェは、「チェルノ」の原動力。スタッフ募集中。(寛)